

テント一週一文（き）——「3.21 さようなら原発全国集会」での川内原発行政訴訟ブースの報告書

（承前）

農業を5年ほど前から始めた男性（以下「農」）がおそろおそろ「それですね」と女性二人の会話に口を挟もうとします。以前この男性にタブレットを借りたことのある女性（前回と同じく「タ」）にはそれは聞こえません。あるいは聞こえていても、自分が喋り始めたことは最後まで喋る、という強い覚悟なのかもしれません。

タ：判決や決定って、結局は裁判官個人の判断に左右されると思わない？ 私には裁判はすべていい加減に見えるわ。

と、前回の「新」、洋品店の女主人（以下「洋」）に強く同意を求めます。

洋：そうやってしまうと身も蓋もない感じがするわ。殿様の時代の裁判ではなくて近代国家の裁判なのだから、そうならないように制度設計はしていると思うわよ、基本的にはね。

タ：またまた、教科書のようなことをおっしゃるのね。

洋：そうじゃないの？ それに、裁判官の判断一つで決まると言いきってしまうと人々の悲しみはどこに行けばいいの？

タ：人の悲しみのために真実を言いくるめるって言うわけ？

洋：なんで、そんな言い方するの？ 裁判だって、人々の心情に配慮した判断をし、人々の悲しみを希望に向けて誘導してくれることだってあるんじゃないの？

農：あもう、ですね……

「タ」は「農」の言うことには耳を傾けないと決めているようで、「洋」に向けて続けます。

タ：私の弟はレストランをやっていて、裁判で負けたことも勝ったこともあるんだけど、裁判については私と同じことを言うわよ。

洋：なんか、うまく言えないけど、私はそんな風には割り切れないわ。と悩みつつ、「農」に向かって「何？」と振ってくれました。

「農」は「もう宜しいんですか？」と遠慮して二人を交互に見ます。これは遠慮深いと言うよりも、自分には耳を傾ける気配のない「タ」への意向伺いという用心深さのようです。

洋：宜しくはないけど、この方との今のテーマはあまり生産的じゃないわ。

農：そうかもしれませんね。でも生産的には見えないところに要点が隠されているって言うこともありますよ。

タ：農業ではそんなことはよくあるの？

農：経験を積んだ人の仕事を見ていると、私が諦めたことを上手に生かしている場合もありますからね。

タ：それを知ったときにはホッとするでしょう。

農：ホッともしませんね。自分の至らなさに悲しくなりますね。紐の切り方一つでも私が切る場合と周りの方が切るのとは違いますものね。

洋：紐の切り方？

農：仕事で使った物をしまう時に紐で縛るでしょう。その残った紐を切るときの切り方ですよ。

タ：えっ、そんなところにも熟練さが関わるわけ。

農：私はそんなことはどうでもいい、切ればいい、と、諦めていた、と言うより、関心を持たなかったのです。ところが、熟練者たちは実に上手にきれいに切るんです。それで何事も非生産的なことはないのではと思った次第です。

タ+洋：フーン。それであなたはさっき何を言いたかったの？

農：失礼いたしました。先ほどメールが来ましてね、そのことを報告しておこうかと思ったんですよ。

タ：どなたからのメール？

農：先日3月21日に代々木公園で「3.21 さようなら原発全国集会」があり、川内原発行政訴訟の原告の一人小林さんが川内原発行政訴訟ブースを出店する案内を、前々回紹介したかと思います。

一週一文（あ） http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/180319kuriyama.pdf

洋：覚えているわ。

農：その報告が小林さんから送られて来たんですよ。

タ：報告書を出すって律儀な方ね。

洋：どんな具合だったの？

農：私も今メールを見たところで報告者自体は未読。短いので読んでみてください。

タ+洋：分ったわ。有り難う。

（文責 栗山次郎）

2018年4月2日公開

参照：小林和博「3.21 さようなら原発全国集会の報告」

http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/180402kobayashi.pdf